

五十五の二 園丁と蝶の対話 「認識と言語を巡って」その五、補遺

園丁 あの一、莊周さん。

莊周 なんです、ためらいがちに。

園丁 今回の対話で、ニーチェのことを議論に乗せることができませんでした。その著作三冊（『ツァラトゥストラはこう言った』、『道徳の系譜』、『この人を見よ』）と、ニーチェについて書かれた新書を読んでいたのです。僕の記憶力の無さを明かしていますが、それだけでなく、問題意識なく書物を読んでもだめだということを教えられます。対話のあと、よい奇縁に恵まれて、新訳『愉しい学問』が出たことを知りました。ニーチェの著作ではまずこれを読むべきだったのです。アフオリズムの形式でさまざまのことを考えているこの書物で、僕はニーチェの思想をある程度とらえることができましたと思います。めんどうをおかけしますが、追加の思索につきあってもらえませんか。

莊周 ええ、いいですよ。わたしもニーチェさんのように何事にも明るく――真似のできない独特なものです――立ち向かいたいものだと思っていますから。

E—2 どこまでを認識と呼べばよいのか

園丁 竹田青嗣さんは、現代哲学のあらゆる領域で認識は可能であるか可能でないかの果てしない思弁的論証が続いていると指摘して、物理主義的実在論と相対主義の対立、あるいは、人文領域における認識について、独断論的解釈学と認識的相対主義を批判しました。その果てしない思弁的論証の対立は、現代哲学がニーチェとフッサールの本体論解体の原理を黙過したせいだ、と竹田さんは言います。しかし、フッサールの哲学を僕たちなりに精いっぱい考察してみても、ヘーゲルたちドイツ観念論の人たちが人間理性で到達できる限界外にカントの危ぶむ「理念」へ超越したのに対して、フッサールは反転して意識の領域をつくり出しそこへ超越したのだという結論に至りました。フッサールの「本体論解体」の議論も、僕たちの議論している認識とは相容れないのです。そうすると、園丁の貧弱な知識でこういうことを言うのは畏れ多いことですが、現代の多くの哲学者たちは、認識について、思弁的論証つまり経験と有効なかかわりをもてない形而上学に励んでいるということになるのでしょうか？。

莊周 いきなり、えらいことを言い出しましたね。

園丁 お相手をさせて、あなたをこんなところへまで引っぱってきて申しわけありません。

僕は、哲学者のあいだで議論がかみ合わないのは、人によって認識という言葉を使って使用しているからだと考えます。カントは超越を戒めるのですから、その「認識」には限界があります、その範囲は経験の及ぶ限りです。こういう意味の認識は、経験の世界にとどまったままで遂行すべきものです。これを、哲学を職業とする人たちは素朴實在論にすぎない平凡な考えと見なすのでしょうか。でも僕は、日常生活でそういう哲学者たちと同様に素朴實在論的に行動するだけでなく、大事な事柄でも、同じ経験的世界にいるのですから、経験的に問題にできる事・物を批判の方法で考察し行動するほかによい道はないと考えます。それがカントの勧める道だと思えます。

荘周 うん、わたしもそれを共通理解とすることに同意しました。わたしたちは、カントの超越の戒めを認識の彼岸へ渡ることの断念と考えることにしたのでした。それで、ニーチエはこのこととどう関係するのですか？。

園丁 はい。竹田さんがフツサルを後続させたニーチエは認識という言葉を使うに使うのか、という点に関係します。

園丁 ニーチエは僕より百年前に生まれました。十九世紀後半のヨーロッパは、啓蒙の時代のあとの近代が達成を果たしつつあり、人類は近代というものを一通り経験したと言

えるでしょう。農業社会から工業社会への転換が進み、グローバル資本主義経済は成立し、政治体制は国民国家になり、社会はゲマインシャフトからゲゼルシャフトに移行しました。自然科学は諸分野で大いなる発展をみせ、社会科学もそれに刺激されながら学問的な取り組みを進展させ、人文学も近代に対応するように緻密になりました。文明・文化全般に高揚の時代だったと言えるでしょう。そして、カントが認識を位置づけなおして展開を始めた近代哲学もさまざま議論を経て拡散の様相を示していました。その近代興隆の時代、伝統文化を体現する牧師の家庭に育ったニーチェは、それら全部を一身に引き受けるようにして考え、衝撃・衝迫を著作に表現したと考えられます。

莊周　そうですねー。それで？。

園丁　大学で哲学の仕事をしたかったようですが、その鋭敏すぎる精神が彼を在野の人にしました。『愉しい学問』を読むと、当時の哲学・思想に対してそれではいけないという思いが非常に強く表われています。近代を引き受けようとして、あらゆることに問題があると感じ、それを批判する衝迫が起こったようです。書きつづる文章は、「おのれの時代全体に抵抗」し、そこにある思想を根本的に批判します。文明論にまで及ぶ広い範囲を対象とすることになりました。一つ一つの項目は主題をもち関連はありますが、体系的に組み立てるいとまもないほど問題が彼に立ち現われるといった感じですね。

莊周 漠然とした感想ばかりでは問答になりません。それで、君はどう考えるのですか？。

園丁 はい。なんとか内容に踏み込んで考えてみます。巻頭の文一番のタイトルは「この世に生きることの目的を説く教師」です。ニーチェが思索して見出すのは、万人は全体として、また個人は個別に、「人類という種族の保持に役立つことを行なう使命」をもつということ。この考えは、「（それが、人間の）本能で、人類という畜群動物種の本質だ」と認定することにつながります。そうすると生じる事態は彼が「存在という名の喜劇」と呼ぶものですが、それをこれまでの人間は自覚できず、道徳と宗教の教師は、「生きるのは価値あることだ」と説いて、「自分がじつは衝動、本能、酔狂、没根拠にすぎないこと」を全力で忘れさせようとしてきた、とニーチェは論難します。生は「必然的に、つねに、おのずから、いかなる目的もなく起こっていること」で、「彼ら大いなる目的の教師がこれまで笑いと理性と自然の支配にことごとく屈してきたことは、否定すべくもない」と断じます。それでも、「人間は、なぜ自分が実存しているのかを知っていると、おりにふれ信じなければならぬし、生を周期的に信頼しなければ、生のうちには理性があるのだと信じなければ、人間は栄えることができぬ」。そこでニーチェは、「人類という種族は（この悲劇とそれからの立ち直りを）飽かず繰り返す

ことだろう」と、また、「笑いと愉しい知恵ばかりでなく、悲劇的なものも、その崇高な非理性もろとも、種の保存の手段と必要のうちなのだ」、と悟るのです。詩を書き詩人になろうかとも考えたニーチェは文学的に表現するので、この書物は箴言集と呼ぶのがふさわしいほです。

莊周 でも、ニーチェの箴言には理由があり何らかの論理があるでしょう。それを妥当に解釈してみせてください。

園丁 そうなのです。そこで僕は、箴言一番にはニーチェの思想と哲学のエッセンスがある、と受けとめます。ニーチェが何よりも問題にしたいのは、「この世でどのようになればよいか」ということだと思えます。その際、人間は本能に従って生きる動物種の一つに過ぎないという判断を基底に置きます。すると、これまで哲学者が論じてきた目的や価値などに意味があるとする根拠はない、と判断せざるをえません。この人は、根拠のないものに根本的な拒否を宣言せずにはおれない性質の人です。こうして、強烈な矛盾をかかえた思索が解決策を見出せないままに続くことになるのだと思えます。「繰りかえす存在という名の悲喜劇」を「引き潮と満ち潮の法則」と呼ぶ心に、諦観が潜んでいるとみるのは見誤りでしょうか。しかし、この人の心性はそれを認めることを許しません。だから、文献学で親しんだ古代ギリシア人に範を求めて、雄々しく戦う力強い

人間像を掲げる、と見てはいけなんでしょうか？。

莊周 それはありがちな安易な解釈ではありませんか？。さらに丁寧を考えてください。

園丁 ニーチェは、目的や価値を否定し、さらに、原因と結果というとらえ方も否定して一つの連続体としてしか見ず、説明ではなく記述があるに過ぎないとし、真理の世界という考え方にも反対します。とにかく、それまでの人間が信用してきたものの全部を疑うのです。これを、竹田さんのように本体論（存在論）の解体と呼ぶのはふさわしいでしょう。でも、意識について、ニーチェはフッサールと違う見方をします。すなわち、「意識をもつことは、生命体の最後の最も遅れた発展であり」、「生存維持本能の連続体が、意識よりもはるかに強力」で、「意識は、過大評価され誤認されている」と言います。また、「意志するとは、よくないんだ力学運動でしかない」とも言います。これらの言明からすると、フッサールをニーチェに結合しようとする竹田さんの哲学は、竹に木を接ぐような方策だと園丁の僕は思います。フッサールが意味や価値を意識から汲みとろうとするのに対して、ニーチェは、動物種としての人間の意識を信頼せず、意味や価値を否定するのです。ニーチェの拒否はフッサールを認めないほど根元的ではないでしょうか。

莊周 でも、ニーチェはすべての考え方に反逆しますから、それらは輻輳していて、中にはフッサールの言い方につながるものがありませんか？。

園丁 僕の読み込みが足りない可能性は否定できません。しかし、フッサールの現象学が眼前にあつたら、ニーチェの拒否はそれを例外とはしなかったでしょう。

園丁 ニーチェが何を「認識」しようとしているかの議論に移りたいと思います。

箴言三五五番は、「われわれの《認識》概念の起源」を論じて、「熟知のものは認識されている」という言い方をします。自然科学は見知らぬものを対象にしてそれを熟知にもたらすので確実だと思われるのだ、これに対し、見知らぬものでないものを対象としようとするのはほとんど矛盾したことであり背理に近いと考えるので、ニーチェは、「内的世界」・「意識の事実」からまず出発すべしという方法を誤謬中の誤謬と言います。フッサールとは対極の位置に立つのです。「認識する」を「問題として見てとること」と言い換えているところもあります。彼の「認識」がめざすものがどういう性質のものか表われています。

箴言五四番は、夢をキイーワードに語られます。「認識をたずさえて、存在しているもの総体に面と向かっている自分」と語り始めて、∴、「過去の一切の感情的存在の総

体が働いている…という夢、…それから覚めても、わたしは夢を見ているのであつて…と続き、結局、「現に生きて働いているもの自体が仮象だ」と観るのです。そして、「夢見ている者たちすべてのなかで、認識者たる私も、自分の踊りを踊るのだ、一切の認識の崇高な帰結と結果は、おそらく、この夢物語の普遍性と、これら夢見ている者たちすべての全的意志疎通と、そしてそれとともに夢の持続を維持するための最高の手段であるし、将来もそうであろう」と観想します。

庄周 ああ、この言葉は、過去に語られた夢の話とそれほど違つてはいないですよ。一切に対して反抗する人が、そのじつ、昔の賢者と同じように、人間と世界をとらえようとすする崇高な姿勢を内に秘めている、とわたしには見えますね。ここの認識者という言葉は、まことに一切を識りたいという欲求をにじませています。

園丁 そのかなわぬ夢は、ニーチェでは反転して現われます。三〇一番では、「思考しつゝ感覚する人間であるわれわれは、いまだ存在していない何かを、つまり評価、色、重さ、遠近法、位階、肯定と否定からなる永遠に成長してやまない世界全体を、現実かつ不断に作り出す者なのだ」というように語られます。ある種の世界把握があるのだけれども、それをつくり出すという能動的な言葉で表現するわけです。そして、「…本性つまり自然とはつねに無価値である」と断じておいて、「かつてひとがそれに何らかの価

値を与え、贈ったのである」という人間肯定の言葉にします。

その人にも心の「引き潮と満ち潮」がありますから、もつとやわらかく表現することも起きます。三三四番では、「歳を重ねるにつれ、私には、人生はいっそう真なるもの、いっそう願わしいもの、いっそう秘密に満ちたものだということが分かってきた」と言い、あのニーチェが、「人生は認識の一手段」——この原則を胸に抱いていれば、勇敢でいられるし、のみならず、愉しく生きることも愉しく笑うこともできるのだ」、と悟ることもあるのです。

莊周 こういう言葉だけ取り出すと、ニーチェがわたしに近い人のように思えてきますね。でも、あの人の劇葉をそういう風に薄めてしまうと、あの人の「価値」もいっしょに流し捨てることになるでしょうよ。

園丁 ともかく、ニーチェが考えているのは「この世でどのように生きればよいか」であって、僕たちが論じている認識の問題を超えている、と思います。

莊周 たしかに、わたしたちの問答は、ニーチェの追求する問いの中心にまで踏み込んでいません。

園丁 そうです。僕たちは、この対話で、そういう問いにまで踏み込もうとはしないので

す。僕は、認識がどのように成立するかという問題と、「いかに生きるか」の問いを、同じ問題空間で扱うのは適切でない、と考えます。

庄周 ああ、そうやって、認識という言葉を識別しなければならぬという先ほどの君の主張につなげるのですね。

園丁 それでは、ニーチェはカントをどう見ていたのでしょうか。三三五番のタイトルは「物理万歳」です。そこで、道徳が考察されています。道徳は物理と対照されているのです。道徳をつくづく考えても、「そういうのが正しい」という判断は衝動、好き嫌い、経験や未経験のうちに前史をもっている」ことになり、結局、根拠はないというのがニーチェの結論です。そうして、謹厳実直な人の定言命法を拒否して、その人を皮肉に老カントと呼びます。

庄周 ちよつと、口をさしはさみますよ。「老」という言葉はたしかにお払い箱にしたい気分を表わしますが、ドイツ人のニーチェがゲーテと同じく老カントと呼ばば、いくらか敬意をただよわせることになり、敬遠ということになりませんか。

園丁 ああ、そうですね。たしかに、カント評価は二義的です。複文の順序を逆にしてみると、まず、「神や魂や自由や不死といった人間を閉じ込める檻をこじ開けたのはカン

トの力と賢さだった」と言っているのです。すなわちニーチェは、本体論の解体を始めたのはカントだと評価しているのです。ところが主文は、「カントは、物自体をこっさり着服した罰として定言命法のとりこになって、自分の開けた檻にふたたび迷い込んだ」なのです。これに対して、僕は反論せずにはおれません。

『純粹理性批判』でカントは、世界とその構成、物質、自然法則、原因性と自由、絶対的に必然的な存在者、第一原因などについて、理念を言いつのればアンチノミーに陥ることを示しました。そして、神のさまざまな存在証明が不可能なことを論じました。まさしく檻をこじ開けたのです。ニーチェは、先ほどの考察からして物自体に多様な意味をこめるのですが、カントは、経験の内でも、まして経験を超える理性の働きを考察したときにも、物自体や存在自体を把握したなどと決して言いませんでした。ただ、宇宙論的理念を考察するときにアンチノミーとして現われる自己矛盾を批判的に解決するために、統整的原理を置きそれを経験的に使用することを提唱し、自然必然性と自由の問題などを宇宙論的理念の中に納めようとしただけです。

カントは、人間が善と考えようとするものについて永遠や不死などの既存の言葉でさまざまに論じます。じつは僕も、先には自己矛盾を指摘したことをなぜこれほど思索しなければならぬのかとまどいました。けれども今では、カントは、理性に限界がある

ことを示したのだが、それでおしまいにするのは忍びがたかったのだ、と思ひ当たります。超越論的観念論を推奨したのではない、昔からの賢者の叡智に敬意を表わし、彼岸にその理念を望見して人間の理性が秩序を失うことを避けようとしたのだ、と考えます。じっさい、カントが道徳に関して結論的に導いた定言命法は、「君の意志の格律が、いつでも同時に普遍的立法の原理として妥当するように行為せよ」だけでした。どこにも道徳家然とした命法はないと言えませんか？。

莊周 しかし、君の読んだ『実践理性批判』の帯には、「崇高な道徳観があふれ、深い人間理解が明かされる」と書いてありませんでしたか。

園丁 そうでしたか？。その感はぬぐえませんがね。ニーチェはその言葉を聞くと耳がくすぐったくなつていやなのです。でも、ニーチェと同じように、「行為の仕方をあらかじめ定めておこうとしても、その指図はどれも荒っぽい外面にかんするものでしかない」と判断し、「善は決して証明できない」と考えたから、カントは道徳法則をただ形式的に提示するにとどめたのではないでしょうか。カントは、「どんな行為も、ひとたび為されたからには、取り返しのつかない唯一無比の仕方になされてしまったこと」だとよく承知していたので、「個々の場合ごとに行為の力学法則を証示することはできない」とニーチェが言うのを承認するのではないでしょうか。また、「いかなる行為も認識不

可能」と言い方には、蓋然的に論じることのできる認識については疑問を呈し、人間の生総体を「認識」することの不可能には同意したでしょう。けれども、「われわれの行為の道徳的価値についてはもはや思い煩ったりしないようにしよう」という提案には答えなかつたと思います。

莊周 ニーチェは、道徳に関してそんな温和な態度を拒否するでしょう。わたしたちのよ
うなぼんやり者には刺激的な言い方が必要なのだと言うでしょうね。

園丁 ですが、三三五番「物理万歳」の最後は、「従来の価値評価と理想の一切は、物理
に関する無知のうえに、もしくは物理との矛盾をかかえて、築き上げられていた」、そ
れで、「われわれは、この世界内にある一切の法則的で必然的なものに関する、最良の
学習者にして発見者とならなければならない、かの意味で創造者たりうるには、われわ
れは物理学者であらねばならない」と言いますよ。ニーチェ好みの「創造者」という言
葉が使われていますが、とても肯定的な表明だと思いませんか。これをまじめに受けと
れば、ニーチェは科学的認識を支持しているのです。五一番では、「実験を許さないど
んな事物もどんな問題も、私は金輪際聞きたくない。これが私の真理感覚の限界である」
とも言っていますよ。まるでポパーのような言い方じゃありませんか。

莊周 おや、まあ！。そういう解釈にはニーチェもびつくりするでしょうね。あなたはカ

ントの延長上にある、と言われたら！。

園丁 もちろん、ニーチェはそれで満足しているわけではありません。唯物論的自然科学者が、ちっぽけな人間理性の助けによって究極的には意のままにできる「真理の世界」を信じて疑わないのを信仰と呼びます。科学的世界解釈は、一切の可能な世界解釈のうちで最も間抜けなものの一つ、すなわち意味の乏しいもの一つかもしれないのだ、と言います。本質的に機械論的な世界とは本質的に無意味な世界であろう、と考えるのです。こう考えれば、やはり、確実な認識の先の意味や価値が問題とならざるをえません。他方で、自分を、神を失った者にして反形而上学の徒であると考えるニーチェは、一つのアポリアに直面しているのです。にもかかわらず、ニーチェは、カントのように断念を決意することができません。そこで、力への意志、生への意志をもって雄々しく生きるという道をめざすのです。それはしかし、意味や価値を否定するにしても、「生きること」にはほかなりません。

莊周 君は、やはり、ニーチェをそういう風に受けとめますか。

園丁 ドイツ人の哲学をふりかえる三五七番で、参考になる見解を述べています。ライブニッツを引いて、意識性とは表象の偶有性の一つにすぎず、表象の必然な本質的屬性で

はない、それゆえ、われわれが意識と呼んでいるものは、精神的な心的世界の状態の一つでしかなく、心的世界それ自体ではない、と考えています。そして、カントは因果性という概念にとてつもない疑問符を記した、すなわち、カントが始めたのは、因果性という概念がそもそも意味をもつ領域を慎重に限界づけた、と考えます。

その上で、ニーチェはなお、ライブニッツとともに「内的世界ははるかに豊かである」と思い、カントとともに、自然科学的認識・因果性による認識に「価値が少ない」と考えよう、と主張するのです。ヘーゲルについては、（神的なものを遅延させたといいます）、「発展」という概念（弁証法という言葉は使いませんね）がダーウィン主義を導いたと見ます。無神論の先行者としてシヨールペンハウアーを挙げておいて、「この世に生きることにいったい意味などあるのか」という問いが来ます。ここには、先行する哲学者と同様に、認識を超えたことを思索しようとしていることがまた顕れています。

莊周 結局、昔から考え深い人たちはみなそういうことを思索したのです。哲学の基礎を考察したカントも例外ではないと思います、その限界を弁えながらでしたが。

園丁 そうですね、莊周さん。あなたもそういうことを思索しようと思いましたね。園丁の僕さえ、ときにはそうしますもの。

莊周 それにしても、君の議論は同じようなところを巡っているように見えますよ。ニーチェの言う回帰のように。

園丁 そうですね。この箴言集がそういう傾向を帯びていて、繰りかえし気になってしかたがない事柄を考えているからではないでしょうか。徹底的に批判しながら、それでもどうすればよいかと考えてしまうのです。そういう事柄が、ニーチェの中心的に考えていることだと思えます。繰りかえしになります。結局、カントが認識論で論じた確実な認識を超えることに関心があるのです。形而下のことではなく形而上のことを《認識》しようとしているのです。しかし、それを正面から考えると、超越となり形而上学に陥るのは避けようがありません。そのアポリアのブラックホールから脱出するのがツアラトウストラなのではないでしょうか？。

さて、ここまで見てきた数々の表白のあとに、「神的なものを完全に剝奪された自然、純粋な自然でもってわれわれ人間を自然化することを始められるのはいつのことだろう」、という言葉が出現します。

莊周 その感慨は、現代、誰もがもつ感慨ではないでしょうか。君の言い方を引き継げば、人類は、二十世紀にもう一巡りの経験をしたけれども、まだその道の最初の辺にいます。でしようよ。

園丁 それへ到達する人間を、ニーチェは認識者とか彼岸の人間と呼んでいる、と僕には聞こえます。

終わりに付け加えれば、同時代の進化論こそニーチェに最も強烈な衝撃を与えたのだ、と僕は思います。『愉しい学問』の随所に人間を生物種として観る見方がにじんでいます。それは、進化論を受け入れたことからくるのだと思います。近代思想の全体が「神は死んだ」という率直な表現をもたらしたのですが、重要な要素の一つが進化論なのだと思えます。その受容は、ニーチェにおいても、科学を信仰と呼ぶ態度を上回るほどの力をもったのでしよう。